

建築から見る唐招提寺の鎌倉復興

鈴木嘉吉

一 礼堂の解脱天井

唐招提寺伽藍の金堂と講堂が前後に建並ぶ中心部の東側には、礼堂と呼ばれる南北に細長い建築がある。ほぼ中央に土間で通り抜けられる馬道^{めどう}があつてそこから北方は僧房になっているから、本来は礼堂及び東室と称すべきであるが、明治三十七年に特別保護建造物（現在の重要文化財）に指定された時の名称が現在も続いている。その指定説明は次のようなものである。

「寺伝天平宝字年間創立、建仁年間解脱上人再興、弘安七年、元亨三年、元禄十年修繕ス、其形式ハ明カニ鎌倉時代ニ属スルモノニシテ、昔時ノ所謂三面僧房ノ参考ニ資セラルヘキ者ナリ、内部ノ天井ヲ俗ニ解脱天井ト称ス」。

ここで解脱天井と呼ぶのは礼堂の格天井が幅の狭い板を格縁に対して対角線に張り、その方向を一間ごとに変えた形式になっているもので、近代和風建築では時々見かけるモダンな意匠であるが、古建築には他に例がない。

『招提千歳伝記』には第十九祖・貞慶律師（また解脱と号す）の伝として建仁三年（一二〇三）、寺の一僧坊を補して道場とし釈迦大念仏会を開いたことが記される。これが年中行事となつて現在も引き継がれているから、唐招提寺にとつては鎌倉復興のシンボルとなる大法会であつた。

唐招提寺には平安時代後期に寺勢が衰えていたと伝える有名な説話がある。それは中川寺実範が寺を訪れると殿宇は

荒廃して住僧も少なく、僅かに残った老僧が田を耕していたので鑑真を祀る御影堂が何処かを問い合わせ、そこで老僧から戒を授かったというのである。その後、実範は唐招提寺に入り、永久四年（一一一六）には官に奏上して伽藍を修理し、また律の復興に努めたという。この話は寺の歴史を記す『招提千歳伝記』のほか『元亨釈書』にも載せられているが、どうもかなりの誇張が含まれているらしい。

というのは嘉承元年（一一〇六）に大江親通が大和の古寺を巡礼した時の手記と推定されている『七大寺日記』には、金堂とその東の宝蔵及び西北方の御影堂が取り上げられて、これらが拝観の対象となっていたことを記すし、さらに同人が三十四年後の保延六年（一一四〇）に再び巡った時の記録『七大寺巡礼私記』には、講堂や阿弥陀院が加えられている。唐招提寺には創建期の建築として金堂・講堂・宝蔵・経蔵が現存しているから、平安時代後期にはこれに加えて御影堂も存立し、その伽藍の威容は今日よりむしろ上回っていたことが想像される。

先般行われた金堂の解体修理工事（平成十二～二十一年）では、飛檐垂木四一二本のうち一割程度が平安後期の取替材と判明した。年輪年代が一〇六二～九九年で、ちょうど実範が修理した年代と合う。飛檐垂木の七割がさらに後代の元禄・明治材に替わっているから、これだけでは断定できないが、平安後期には金堂の軒先がかなり破損していて中規模な修理を行ったことが判る。しかしこの程度の破損は奈良時代に建立されて三百年以上を経た建物では当然のことで、説話が伝えるほど、唐招提寺が荒れ果てていたとは思われない。

ここでもう一度解脱天井に戻ると、実は礼堂・東室の現在の建築は弘安七年（一二八四）の建立と考えられている。詳細は章を改めて述べるが頭貫の木鼻や南面妻飾の肘木鼻の線形（曲線形の造り出し）などの形式が、鎌倉時代後半期の特色を示すからである。解脱天井と俗称される礼堂の格天井も同時のもので、建仁年間までは遡らない。現在の建物には東室の小屋組部材に前身建築のものとと思われる古材があり、弘安建立時にはそれ以前にあった僧房の部材を転用したことが判るが、礼堂の格天井にはそうした形跡も見当たらない。どうもこれは一間ごとに向きを変えて斜めに板を張った斬新な意匠が珍しく、後世にそれを解脱上人に託したもののようである。おそらく実際にも建仁三年当時には、ここ

に前身の僧房が建っていて、貞慶はそれを改修して道場とし、釈迦大念仏会を開いたのであろう。

南都の寺では平安時代後期に僧房の一部を改修して仏堂や道場に改めた例がかなり見られる。七堂伽藍の一つに数えられた長大な僧房も、寺僧の減少や子院の出現で住居としての役割が大幅に低下したからである。法隆寺では嘉承二年（一一〇七）に東室大坊が顛倒し、その旧材も利用して保安二年（一一二一）に再建した時に、南端の三房分を聖徳太子とその侍者像を祀る聖霊院とした。全体が九房だから三分の一を仏堂に転換したのである。聖徳太子への崇敬はそれまで東院伽藍で行われていたのであったが、以後は本寺でも聖霊会が始まる。保安二年は太子の五百回忌に当たり、これにやや先立って元永二年（一一一九）には、それまで別組織であった上宮王院（東院）を傘下に納めて一体化している。これは太子信仰を寺勢興隆の旗標として鮮明に揚げたもので、当時京都を中心に盛行した浄土信仰に対する南都寺院の巻き返しであった。聖霊院はその後、弘安八年（一二八五）に僧房から切離して改築され、現在の建物となった。

法隆寺では同じ頃、東室と対称の西室付近に三経院も造られた。聖徳太子が撰述した勝鬘・維摩・法華の三経を講演する道場で、同様に太子信仰昂揚のためである。大治元年（一一二六）に開浦寺三昧堂を移して道場としたもので、寛喜三年（一一三七）に西室を再建した時に南北一九間に及ぶ長大な建物のうち南方の七間を三経院、北方を僧房としている。これが現存する三経院及び西室である。

一方、南都の寺でも浄土信仰の波に僧房の一部が呑み込まれた寺もある。元興寺がその例で、馬道を挟んで十二房からなる僧房（東室南階太房）の一室に、大江親通が巡礼した嘉承元年（一一〇七）には、ここに住んだという奈良時代の僧・智光が図写した極楽曼陀羅を祀っていたが、やがて浄土教の隆盛と共に念仏道場となり、建久八年（一一九七）頃に三房分の広さの曼荼羅堂に改造したのである。これを寛元二年（一二四四）に本格的な仏堂として建て直したのが現在の元興寺極楽坊本堂で、その西側には鎌倉初期に改築された禅室が旧僧房の四房分の規模を踏襲して、軒を接して建っている。

建仁三年（一一〇三）に貞慶が唐招提寺の一僧坊を補修して釈迦大念仏会を開いたのも、こうした南都の大寺の動向

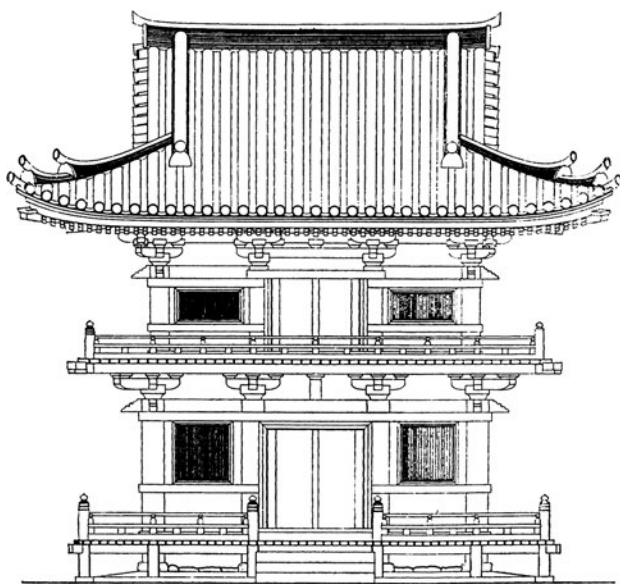
の一例である。貞慶は元久二年（一二〇五）に法然の念仏停止を求めた『興福寺奏状』の起草者として知られ、当時南都教学復興運動の旗頭であった。九条からなるその条文の一には「釈迦を軽んずる失」をあげて糾弾している。「釈迦に帰れ」が奈良の寺々共通の目標となっていたのである。唐招提寺には現在も引き続き行われる釈迦念仏会の本尊として、清涼寺式釈迦如来像がある。しかしこれは胎内納入文書から正嘉二年（一二五八）の造立と知られ、貞慶の時のものではない。現礼堂の位置には奈良時代に寺が創建された時から東一房・東二房と呼ばれた僧房があった。貞慶が改修した建物はその後建て直されたが、その特色ある形式の天井が解脱上人の遺徳の象徴として伝えられているのである。

二 舍利殿（鼓楼）の建立

仁治元年（一二四〇）、礼堂のすぐ西側に鼓楼が建立された。本寺中興開山覚盛の忌日に当たる五月十九日に行われる「うちわまき」の舞台となることで知られ、当日はいつも多くの参詣者で賑わう。金堂と講堂に挟まれた中庭には東方にこの鼓楼、西方に鐘楼が対称の位置に建てられていて、古代伽藍の経楼・鐘楼の配置を守っている。西の鐘楼は江戸時代の四脚造で吹き放しの簡素な建物に替わっているが、梵鐘は平安時代前期のものである。

この建物がいつから鼓楼と呼ばれたのかは明らかでない。東西の建物を鐘楼・鼓楼とするのは禅宗の一派・黄檗宗で行われている方式で、実際に太鼓が置かれて法会の際には東西の鐘と太鼓が賑やかに打ち鳴らされる。元和四年（一六一八）に造られた二階に上る内部階段の墨書や江戸時代初期の当寺境内図には「舍利殿」と記されているから、元禄十一年（一六九八）に東室を改造してそこに舍利を移してからの名称であろう。

周知のように黄檗宗は中国僧隠元が承応三年（一六五四）に來日して京都宇治に萬福寺を建立して広めた宗派で、その建築も目新しいものであった。古代伽藍の鐘楼・経楼は現在も法隆寺西院伽藍でみられるように下層の組物上に高欄をめぐらした廻縁を設け、その上に柱盤を置いて柱筋を下層より少し内側に引き込んだ切妻屋根の上層をのせる形式



唐招提寺鼓楼正面図

であった。楼造と呼ぶ構法である。この鼓楼も同様な構造であるが下層に板敷床を設けて廻縁をめぐらし、屋根も入母屋造とするのが変わっている。おそらくそのような外観の珍しさが経楼または経蔵と呼ぶのをためらわせ、鼓楼の名称を選ぶことになったのであろう。興福寺でも享保二年（一七一七）の地割図では鐘楼・鼓楼としているから、これが当時の新式の呼称であつたらしい。なお屋根を入母屋造とするのは平安時代になって鐘楼が楼造から袴腰付の形式に変わると、屋根も切妻造から入母屋造に変化する姿に倣つたものと思われる。その袴腰付鐘楼の最古の例は応保三年（一一六三）建立の法隆寺東院鐘楼にみられ、以後は鐘楼は袴腰付か四脚造の二種類となった。

本来の経楼が初層に板敷の床を設けた珍しい形式で建立されたのは、この建物が最初から仏舍利を安置する舍利殿として計画されたためである。現在初層に天井一杯まで届く大型の厨子を置き、内に金亀舍利塔に納めた鑑真請来の舍利をまつている。既述のように元禄十一年に東室を改造して内部を舍利殿としそこに移されたが、昭和十五年に礼堂・東室の修理が行われた際に東室が元来の僧房の間取りに復原され、舍利は旧位置に戻った。従つて建物の名称も舍利殿に復すべきであつたが明治指定時のままとなっている。

鑑真請来の舍利は平安時代末には校倉造の宝蔵に納められていた。伽藍の裏手に当たる礼堂の東側には経蔵・宝蔵と呼ぶ二棟の校倉が、いずれも中心部に向かって西面して南北に並んで建っている。共に奈良時代に唐招提寺が創立された時からの建築で、特に経蔵は鑑真が寺を建立する時

に、寺地として朝廷から賜わった新田部親王の旧宅にあった倉を、少し改造して再利用した建物である。嘉承元年（一〇六）にこの寺を訪れた大江親通は『七大寺日記』に金堂東宝蔵で舍利を拝観したことを記している。これが現在の経蔵・宝蔵のどちらに当たるか判らないが、宝蔵のほうが少し規模が大きく、使われている木材も上質なので、舍利はそこに納められていたのであろう。

京都の東寺（教王護国寺）でも空海が請来した舍利は高床造の倉に納められていた。境内の東北方に池に囲まれて校倉が建つが、ここにはもともと南北二棟の宝蔵があった。舍利はその南倉に納められ、建物は大経蔵と呼ばれていたのである。なお現在の校倉は旧宝蔵が平安時代に二度火災に遇った後、鎌倉時代初頭に他から移築されたものである。

一方、『諸寺縁起集』にのせる「招提寺建立縁起」には「一。経楼一基。納仏舍利半合并仏并像
経律論疏一切宝物等。鐘楼一基。鐘一口。右少僧都造立也。」と記される。これで見ると東西に対立する経楼と鐘楼があつて、そのうち経楼に仏舍利以下の宝物を納

めていたことになる。しかしどうもこれは疑わしい。それは奈良時代の『唐招提寺用度帳』によると当寺には東西の各北一房と呼ぶ僧房内に経蔵が設けられていて、経律論疏などはそちらに納められていた筈と思われるからである。二棟の建物は法隆寺や大安寺の奈良時代の資財帳では「楼二口一口鐘楼（寸尺略）」とあつて、いずれも楼と呼ばれていた。

しかし平安時代の旧流記まで引用して編纂された興福寺の『山階流記』では「一経蔵一基（寸尺略）、一鐘楼一基（同前）」と記している。法隆寺でも現在の呼称は鐘楼・経蔵である。どうも楼（タカトノ）の語感が用途に対してしっくりせず経蔵に変わったらしいのである。東寺で宝蔵を大経蔵と呼んだのは伽藍の中の鐘楼・経蔵と区分したのであろう。このような例からみると唐招提寺でも舍利は元来宝蔵に安置されていたのを鎌倉時代に現在の鼓楼が建立された時に移したもので、「建立縁起」の記事はそうした既成事実を、後世に伽藍創建時のことのように過らせたものと思われるのである。

この建物が最初から舍利殿として計画されたことは、次のような棟木銘からも察せられる。

「仁治元年庚子七月廿六日 左方大工 藤井成貞 別当法印信忠 勸進聖人兼願 静恩大法師 俊円法師
右方大工 寺主舜禪 小别当大法師縁鎮 行事所 順円法師 戒円法師」

この棟木銘には通常は最初に記す建物名がないが勧進で建立されたことがわかる。よく知られているように治承四年（一一八〇）の兵火で焼けた東大寺の復興は、俊乗坊重源を始め代々の勧進職の活動によって進められた。法隆寺東院伽藍も承久元年（一二一九）に舍利殿・絵殿を改築したのを皮切りに、寛喜二年（一二三〇）夢殿大修理、同三年礼堂再建が行われて現在の伽藍が整ったが、これらはいずれも勧進による成果であった。唐招提寺の場合も伽藍復興と舍利信仰の高揚を掲げてまずこの建物が勧進の目標とされたのである。その際、鑑真請来の舍利が古くは経楼に置かれていたとする理由付けも必要となったのであろう。しかし舍利殿を経楼の形で建てようというのは非凡な着想である。おそらく先に貞慶が僧房を改修して広い空間とした道場が現在の礼堂の前身で、仏舎利の礼拝場所として最適と考えられたからに相違ない。現礼堂と鼓楼とは縁の高さがほぼ等しく、距離もごく近接している。

なお棟木銘の別当法印信忠は正治二年（一二〇〇）興福寺維摩会堅義を勤め、後に薬師寺別当になった僧と思われるが、『招提千歳伝記』では第十九祖貞慶、二十祖戒如、二十一祖^{中興第}一^世覚盛としていてその名はない。また同書では覚盛は寛元二年（一二四四）唐招提寺に入寺し、その夏講堂で舍利会を開いたと記している。舍利殿建立の四年後である。

建物は桁行三間（一八尺）、梁間二間（一三尺）、楼造で、桁行長さは法隆寺経蔵の六割弱しかない。しかし通常は桁行脇間と揃える梁行の柱間寸法をここでは二割広げている（桁行脇間五・五尺、梁行二間各六・五尺）ので、建物に奥深さが生まれ大きくみせている。隅の間の寸法が桁行と梁間で異なると隅柱上から真隅（四五度）で内部に引き込んだ梁や隅木の尻の納まりに不都合を生じるが、この建物では内部に柱が立たないので部材同士の組合せでうまく処理されていて破綻はない。

もう一つこの建物の大きな特色は柱が太いことで初層の柱径は一尺二寸ある。法隆寺経蔵の柱径が下端で一・四尺、頭貫下で一・二四尺だから建物の規模に比べてかなり太い。柱の太さは当建築のように鎌倉時代に貫を使って構造を強化するようになると一般的に細くなる。その点で当建築は異例といつてよく、先の奥深さと合わせて小規模ではあるが重厚感をもつ姿となっているのである。

細部をみると初層は柱上に上層の縁を支える出三斗を組み、上層は出組（一手先）で軒桁を廻らす。上層の中央間で左右の太斗上の肘木を連続させた一本とするのは珍しいが、これは中央間に設けた両開扉口の成を高くするために、内法長押を頭貫前面に取り付けて見えなくしたのを補った意匠で他にはない。全体に天平建築以来の伝統をひく和様で造られ、わずかに初層・上層とも頭貫木鼻に大仏様の線形を施す。これまで装飾的要素をもたなかった和様に鎌倉時代に入って新しく加わったもので新和様と呼ばれ、その最も早い例となっている。垂木が細く軒廻りは繊細だが未だ六技掛には至らず、各面中央に力垂木を用いるのは興福寺北円堂（一二〇年）と同類の技法である。棟木銘にある大工藤井成貞はおそらく興福寺の鎌倉復興に係わった工匠であろう。なお舍利を納めた内部の厨子は下の台に文保元年（一二三二）の墨書銘があつて造立年次が知られるが、その上部の宝形屋根をのせた本体は後世の修理改造が大きく、現在のようになり三方に扉を開き背面を引戸とする囲いが当初か否か疑問がもたれている。現在東側が背面として置かれているのも不審で、舍利殿自体は上下階とも東西両面の中央間を板扉、他は連子窓とするが、下階の廻縁に設けた高欄は東面中央間を開き前に階段をつけている。これは礼堂から舍利を拝むことを考慮した構えと思われ、厨子の現状が果たして本来のものか疑問がある。

舍利殿（鼓楼）は古代伽藍の経楼を下敷にしながら、日本式の板敷床と廻縁を設けて、礼堂に坐って参拝する大衆との親しみ易さを意図しながら建てられた意匠的にも勝れた建築である。仏教建築は平安時代に入ると日本化が進み、本来は高い基壇上に建てられた仏堂や塔も板敷床で周囲に廻縁をもつ形式に変化した。しかし当寺のように金堂と講堂が創建時のまま基壇上に建つ中庭に、日本式の建築を建てるのはよほどの勇氣と情熱が必要であつたと想像される。鎌倉時代は官寺の伝統が根強い南都でも仏教の大衆化を急速に進展させたが、そうした動向を象徴する建築といつてよいであらう。なお蛇足となるが天平宝字三年（七五九）に鑑真による私寺として創建された唐招提寺も、跡を継いだ如宝らの努力によって大同元年（八〇六）、十五大寺（官寺）の列に加えられている。

三 金堂の修理と講堂の大改造

金堂は鎌倉時代に入ると建築や仏像の修理記録が目立つようになる。まず文治元年（一一八五）の地震で金堂千手観音像と中門が倒れ、二ヶ月後に観音像を修理した。次いで康元元年（一二五六）に金堂と中尊盧舍那仏の修理があり、文永七年（一二七〇）には金堂と千手観音像が修理されて盛大な供養が行われた。『招提千歳伝記』に「文永七年不加修理」とあり、また『記録法蔵』は次のように記している。「金堂供養事^{文永七年庚午四月六日 舞楽千僧供等并千手開眼導師実相上人 呪願円律上人}」。この事から金堂は文永七年に大修理が行われたものと従来考えられてきた。現在の金堂は扉口、窓、長押などの造作回りに大改修が行われていて両開板扉や連子窓は幅や成が当初より縮小され、その上下に取付けた長押は太い材となっている。これは窓の上端に通した貫と関連した仕事で、柱と柱を結ぶ横材を新たに加えたり従来より太くしたりして構造補強を計ったものである。

前章でもふれた通り、貫は鎌倉時代に東大寺大仏殿を復興する時に重源が中国建築の構法を採り入れた大仏様から始まる新技術で、和様でも早く興福寺北円堂（一一二〇年）で使われている。構造補強の効果が実感されるため、東大寺転害門を建久六年（一一九五）に大修理した際にも腰貫が加えられた。奈良時代に建立された建築は四百年を経た鎌倉時代には相当に破損も進んでいたから修理の規模も大きくならざるを得ない。唐招提寺金堂の文永修理はそのような大がかりな構造強化を行ったものと思われたのである。

しかし平成十二～二十一年に行われた金堂の解体修理工事で、これらの建物本体の修理改造はすべて江戸時代の元禄六～七年（一六九三～九四）に行われたもので、鎌倉期の修理は堂内石造仏壇の築造と建物周囲基壇の積み直しと判明した。現在の堂内仏壇はこの時のもので、発掘調査では当初の仏壇も同規模であったと推定されたが、築土・外装ともすべて造替されたことが判ったのである。仏壇上の正面及び東西の三面を廻って据えられた木製黒漆塗の供物壇もこれ

に合わせて新設された。また建物周囲の基壇石積は元禄修理時に再び全面的に改修されてそれが現状であったが、鎌倉期も同高、同形式と推定された。建立当初の基壇は凝灰岩壇正積であったが、この時から石材は花崗岩に変わっている。ところでこの基壇修理では重大な変更があった。それは建立当初の基壇が特殊な二重基壇であったのを、現在見られる通常の形式に改めたことである。今回の修理に伴う発掘調査で初めて判明したもののだが、当初の基壇は現地覆石より約六〇cm外方に大型の磚を敷き並べ、その上に凝灰岩の羽目石を置いた高さ四〇cmほどの下成基壇をもっていた。しかし鎌倉期にはおそらく埋もれてしまっていたのであろう。下成基壇は考慮されず上方のみ改装されたのである。西の京に所在する唐招提寺や薬師寺の境内は西側の丘陵地から秋篠川へ流れ込む土砂によって地表面が高まり、現在は前者で約四〇～五〇cm程度、後者で七〇～八〇cm程度、創建当時より高くなっている。鎌倉期の基壇改修も当時の地表面から行われ、そのため下成基壇は失われたのであった。

金堂創建期の二重基壇は他に例がない異色のものである。地覆（延石か）に方四二cm、厚一二cmの大型磚を敷き並べ、凝灰岩の羽目石（地覆兼用か）を立ててその上面にまたおそらく磚を並べた形式である。上面の材は出土していないが上方基壇の地覆石との高低差が小さいので、厚い石材ではなかったと推定される。上方基壇は旧材の断片が出土したので奈良時代に多くみられる凝灰岩壇正積の形式と判明するが、それに磚による裾飾が廻らされていたのである。基壇の高さは現在一・一〇mほどであるが、二重基壇は高さ約一・五〇mで、その外周の地表面は幅約六〇cmほどの玉石敷となっていた。

建物の基壇や外周地表面を磚敷とするのは中国伝統の形式である。唐招提寺金堂には当時の他の寺院建築にはない中国的装飾が見受けられる。その一つは軒の隅木の下（尾垂木上面）に角神と呼ばれる邪鬼像を飾ることで、日本建築はただの束となっている。もう一つは正面五間の扉外面に「蓮之番絵」と呼ばれた華麗な菱形の宝相華文様を画くことである。中国唐代の錦や白銅鏡に見られる文様で、平安時代に寺を訪れた大江親通がわざわざ指摘している。金堂の建築自体は現存する他の奈良時代建築と比べて特に変わった点はなく、どうもこうした装飾的細部で「唐寺」らしさを示そ

うとしていたらしいのである。鎌倉修理時には既に下成基壇は埋もれ、扉絵も剝落が進んでいたであろう。そのため当初の特色が失われ日本式の古代仏殿になったのもやむを得ないことであった。なお現在正面扉に見られる円形の集合唐草文は元禄修理時の補筆で、当初の彩色は八双金具で隠されていた部分から発見された。

通常の仏堂といえは内陣須弥壇上に三方を囲って設置された供物壇もその一例である。古代の金堂は建物の外から仏像を拝むのが原則で、僧侶でも特別な儀式の時以外は堂内に入ることはなかった。しかし平安時代後期になると一般の参詣者

も仏像近くに寄って参拝するようになる。『信貴山縁起絵巻』

の尼公が東大寺大仏殿に参籠する場面はそれをよく表わしている。おそらくそのような参詣者による供台と仏像との隔壁を兼ねて供物壇が造られるようになったのであろう。これも大衆信仰の拡大を示す変化の一端である。奈良の古寺では興福寺東金

堂や新薬師寺本堂に類似例がみられ、後者では早く寛仁五年（一〇二二）に内陣正面の入側柱列の中央三間に四級（現在三級）

の石段を組み、その上に木製三段をのせた供物壇を設けている。興福寺東金堂は現在の建物が応永二十二年（一四一五）再建で、

供物壇も古いが、この形式が何時まで遡るか判らない。なお当

金堂の供物壇は昭和三十四年に私が高所作業用の足場を組むた

めに取外させて頂いたのを森本長老が気に入り、以来そのままの状態となっている。仏像の堂内拝観は以後停止された。

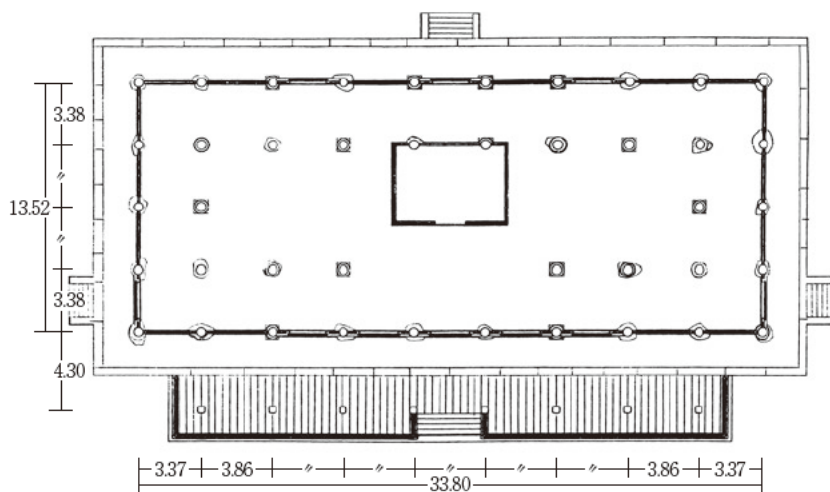
ちなみに古代の仏堂では東大寺法華堂（三月堂）も中々近世

金堂供物壇

には供物壇が設置されていたらしい。現在法華堂の内陣正・側面三方には高欄が廻るが、その平桁と地覆の間には格狭間板を嵌め込んでおり、西側南間の格狭間板には「弘安六年三月十八日自始之間十月□□」の墨書がある。格狭間板を除く高欄材はすべて近世材と明治材であり、両者を取合わせる形式も異例であることから、これは格狭間板が元来、供物壇の部材で、近世末・明治初年に板囲いの閉鎖的な供物壇を現状の開放的な高欄形式に改め、その際に旧材の一部を記念的に転用したものと思われる。唐招提寺金堂の供物壇と年代的にも近接しており、礼拝空間の中世的变化として注目されよう。

金堂の鎌倉修理が仏像の修理と関連して須弥壇の改築や基壇の改装を行った比較的小規模なものであったのに対して、講堂の場合は旧材を利用しながら全く新しい建築に建て直し、仏堂としての性格も変更してしまった大改築であった。よく知られているように唐招提寺講堂は寺を創立する時に朝廷から賜った旧平城宮朝集殿を移設したもので、規模・形式は朝集殿当時をほぼ踏襲し、ただ朝集殿では桁行九間の切妻屋であったのを、入母屋造の屋根に変えた建築である。しかし鎌倉改修では桁行九間・梁間四間、入母屋造の規模はそのままだが、側廻りの組物をそれまでの簡素な大斗肘木から出三斗組に改め、各出入口の板扉を棧唐戸とした。側柱は旧材を削って細め、内法貫や腰貫を通し、頭貫は隅柱から外方へ延ばして繰形付の木鼻で飾る。これらはいずれも鎌倉時代になって新しく生まれた建築技術で、建物がすっかり鎌倉様式に建て替えられたのである。内部でも内陣の二重虹梁臺股式の奈良時代の架構は踏襲されたが、それを利用した折上げ天井が新たに作られて、日本的な雰囲気の室内空間となった。これが現在の講堂である。

これと同様に古代伽藍の比較的簡素な建築を鎌倉式の立派な建物に建て替えた先例は、法隆寺東院伽藍の承久元年（一二一九）から嘉禎三年（一二三三）に行われた大改修工事にある。この時、舍利殿・絵殿はそれまで唐招提寺講堂と同様な大斗肘木組物であったのを出三斗組に改め、夢殿は三斗組を一段積み足し、軒を広げ、屋根も高くしている。これが現在の東院の姿で、それらは治承四年（一一八〇）の兵火による焼亡後、大復興事業を行った東大・興福両寺による南都建築界の活況の反映といつてよい。しかし当寺講堂の場合はさらに一歩進めて仏堂としての機能や性格まで変更



唐招提寺講堂鎌倉時代平面図

してしまったのが大きな問題である。それは江戸時代の延宝年間（一六七三〜八二）の修理の時撤去されて現在は見られないのだが、講堂の正面に七間に互る広い礼堂を設けたことである。堂内の内陣中央前方に虹梁を架けて入側柱二本を撤去し、礼堂から仏像を拝み易いようにも改造した。

前面の礼堂は梁行一四・二尺（四・三m）に及ぶ広いもので、本宇の軒先を葺下ろして向拝状に吹き放しで設けられ、境内古図等によると基壇の上面と揃えて板敷床を張り、外周三方には高欄付の縁を廻らせていた。床下には亀腹が廻り、正面中央に一間の切り込み階段がついていたことが判る。

講堂の鎌倉修理は建治元年（一二七五）に行われ、『記録法蔵』に「次講堂供養建治元年乙十一月十四日五日両日（中略）一、講堂修理、建治元年正月より始之、同年十一月供養、本ハ正面ニ左右ニ柱二本在之、修理之時取之早」と記されている。その前面には吹き放しの礼堂が新設された。礼堂は中国や朝鮮半島では見られない日本独特の施設である。早く奈良時代から始まり、平安時代になると天皇の御願で承平元年（九三二）に建立した醍醐寺金堂のような伽藍の中心仏堂にも設けられるようになる。一方、古代伽藍の講堂は文字通り經典を講ずる堂で講法堂・法堂とも呼ばれた。奈良時代の資財帳をみると大安寺には「僧四百七十三口、沙弥四百十四口」、法隆寺には「僧一百七十六口、沙弥八十七口」が所属して、その重要な勉強の場となっていた。しかし時代の下降と共に住僧は減じ、寺内の

運営も変化して、講堂の機能は低下する。先にあげた醍醐寺では奈良式伽藍に倣って中門・回廊で金堂の前面を固める一方、背後に講堂を建てることはなかった。

当寺講堂もこうした動向の中で大改修が行われ、古代の講堂から中世の仏堂へと変身したのである。同じように古代仏殿の前面に礼堂を付設した例に新薬師寺本堂があり（明治修理時に撤去）、寺の縁起によると延慶三年（一三二〇）と知られるが、それより大分早い。『記録法蔵』は建治元年の講堂修理完成を祝う供養式に参列した僧十二人の名を列記していて、当時の本寺の活況を窺うことができる。その延長ともいべきか、講堂の本尊弥勒仏像も弘安十年（一二八七）新像に造り直し、正応五年（一二九二）に供養している。この時の参列者は僧衆四百余人、尼衆二百余人（『記録法蔵』であった。なお講堂前方入側筋中央二本の柱は、鎌倉改修時に桁行三間（三九天平尺 $\approx$ 一一・五九m）に及ぶ大虹梁を入れて抜き取ったのであったが、さすがに構造上無理であつたらしくかなり早くから旧位置に補強の支柱を立て、明治修理時に他と同様な太い柱に復旧している。

桁行と梁行の違いはあるものの、同様に三間梁を用いて堂内前方の柱を不要とし、広い礼拝空間を創出した例に奈良・生駒の長弓寺本堂（弘安二年（一二七九））がある。唐招提寺講堂の大修理が行われた建治元年（一二七五）と年代が近接し、また両寺は距離的にも近いので、おそらく工人も同系と思われるが、こうした大胆な新構法の採用は大仏様の導入から始まった南都建築界の技術的優秀さを誇示するものでもあった。

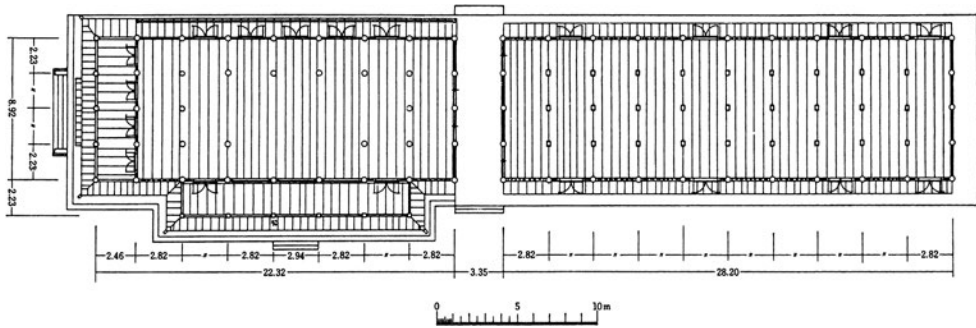
四 礼堂・東室の改築

礼堂・東室は桁行一九間・梁間四間の南北に細長い建物で南から九間目に馬道を設け、南方の八間を礼堂、北方の一〇間を東室とする。屋根は南北両妻を入母屋造とし、礼堂の東面には中央五間に葺下ろしの向拝を設けている。『千歳伝記』には「東室者南北廿八間東西四間半也。此室者往昔天下緇侶遊学舎也。西又北同之。号三面僧房。就中東室者礼

堂絶後建仁年間解脱上人修治之、南方十有三間以号礼堂、加于東西一丈。故十三間與六間也。中央安于赤梅檀迦文像。年中諸会多修此處（下略）」とある。『千歳伝記』の建物規模を示す「間」は近世に一般的な六尺五寸で、南北廿八間は一八二尺（実長一七七・八五尺）、東西四間半は二九・二五尺（実長二九・四〇尺）である。またこの東室以外に西室と北室があつて講堂を取り囲む三面僧房の形態であつたように記すが、近世の境内図をみてもほぼ対称の位置に西室が画かれ、実際にその礎石も残っているものの北室はなかった。西室は天保四年（一八三三）に焼失した。

第一章の解脱天井の項でも記したように『千歳伝記・旧事篇』には「建仁二年壬戌秋八月。解脱上人試修念仏会。勸人修理東室。以為念仏道場。（中略）同三年癸亥自九月十九日至同二十六日。初行釈迦大念仏会。以為永式」とあり、ここは元来全体が僧房であつたのを建仁二年（一一〇二）に貞慶（解脱上人）が馬道から南の部分を改造して道場としたものである。当寺の創建時の僧房は『招提寺建立縁起』に「東北一坊^{（房）}一字、東一房一字、東二僧房一字、東北後一僧房一字、右、唐法載大法師造立如件。（中略）西北一僧房一字、右義浄大法師造立如件。（中略）西北二韓一字大和上室。西一僧房一字、西二房一字、右、清河大使卿家施入如件（下略）」と書き上げられている。『唐招提寺用度帳』には東北第二房も記される。これは他寺の僧房が例えば法隆寺資財帳では「僧房四口^{一口長十七丈五尺 広三丈八尺 一口長十八丈一尺 広三丈三寸}」と記されるのと相違し、長大な建物ではなく独立した房が棟を接して建つ形式であつた。その実態は不明だが講堂側面前端間と東室の馬道を結ぶ梁間一六尺の軒廊（単廊）が発掘されており、その軒廊から南方に東一房、東二房、北方に東北一房、東北二房を並べる配置だったらしいのである。西室もこれと対称で、軒廊に接する東・西の北一房には経蔵が附属していた。

こうした創建時の僧房は平安時代に建替えられて他寺のような細長い建物になったらしい。それは現在の東室の小屋組に多量の古材が転用されていて、それを見るとほぼ現在の東室と同規模の前身建築のものと考えられるからである。但し現在の礼堂・東室が柱上の組物を出三斗組とするのに対して、前身建築は大斗肘木の簡素な形式であつた。建仁二年に貞慶が改修して道場としたのはこの前身建築と思われるが、現在の礼堂は慶安四年（一六五一）に大改造が行われ



唐招提寺礼堂・東室平面図

て小屋組を変更したため古材が残らず、前身建築を探る手がかりがない。

現在の礼堂・東室は弘安七年（一二八四）の建築である。『千歳伝記・旧事篇』には「同（弘安）六年癸未、東室及礼堂再補自正月始」「同七年甲申、東室及礼堂修造落成」と記され、『記録法蔵』にも同文の記事がある。建物をみても内法貫・足固貫を通して軸部を組み固めており、こうした大仏様の新構法が普及するのは鎌倉中期以降である。頭貫の木鼻の形式も建治元年（一二七五）に改修された当寺講堂より下り、弘安二年（一二七九）建立の長弓寺本堂に酷似している。

建物の外観は南北統一されている。即ち丸柱に足固貫・内法貫、頭貫を通して出三斗を組み、中備に間斗束を入れて軒は二軒繁垂木とする。南北両妻を入母屋造とし南は妻飾を虹梁臺股に花肘木、北は虹梁又首組とする。南北同高に板敷床を設け濡縁を付ける。このように外廻りの構造は等しいが内部は、礼堂は丸柱で中央の桁行五間を高い格天井、その南北各一間を低い棹縁天井とするのに対して、東室は方眼状に角柱を立並べ、全体に低い棹縁天井を張っている。これは仏堂と住居の違いであり、建仁二年に貞慶が東室を修理して念仏道場としたというのも、内部の改造が主であったと思われる。

礼堂は鼓楼に納めた舍利を礼拝する東正面と、堂内北方に安置する釈迦像に対して南から拝む二方向の礼拝軸をもつ風変わりな建築である。礼堂桁行八間のうち南端の一間は吹き放しの広縁で、東面の向拝もこの広縁を除く桁行七間の中央五間に設けられている。広縁と向拝は床も一段低い。南端間は柱間寸法も他より狭いので広縁は主屋に取り込まれた向拝に当たり、礼堂は七間×四間の主屋の南

面と東面に向拝がつく形態と考えると理解し易い。舍利殿（鼓楼）はそのすぐ西に建って中心もほぼ揃う。

このように外構えは二方向正面だが内部は東正面に統一されている。桁行七間・梁間四間の入側柱筋に丸柱を立て、東入側列の中央二本は省略する。いわば五間×二間の身舎に四面庇を廻らせ、身舎正面の柱二本を抜き取った柱配置である。講堂で正面二本の柱を抜き、礼拝空間を広げたのと同じ発想といつてよい。天井も中央五間に高い格天井（解脱天井）を梁行方向全体に互って張り、両脇一間通りは北へ連続する馬道や東室と同高、同形式の棹縁天井としている。

こうした内部空間に合わせて外廻りの柱間装置も向拝が取り付く東面は中央三間部戸、その両脇一間棹唐戸、端の間連子窓、鼓楼に接する西面は中央五間棹唐戸、両端間連子窓とする。東面の部戸は平安時代後期から盛行した住宅風仏堂の定番の構えであり、背後に当たる西面を棹唐戸で広く開放するのは鑑真請来の仏舍利を安置する舍利殿（鼓楼）との親近感を意図したと考えられる。

一方、南からの礼拝空間は南端の吹き放しの広縁に面して四間とも棹唐戸を設けて仏堂正面らしい外観を造るものの、これに対応する内部施設は全くない。現在は前述の五間×二間の身舎相当部の北より第二柱筋に來迎壁を設け、その前面に厨子に納めた釈迦如来像を安置しているが、これは昭和十二（一九三九）年に解体修理を行った際に建物全体を創建当時の姿に復原し、紙襖仕立ての來迎嵌（現状変更説明）を仮設したものである。修理前には、この柱筋より天井格子で一コマ後方に來迎柱を立て、前面の方四コマの天井を折上げ小組格天井としてその下に台座にのる厨子を置いていた。しかしこれらはおそらく室町時代の改造と推定され、撤去して柱や天井を復旧したのであったが、そうすると厨子を安置する場所としては他に考えられないとして來迎壁を設けたのである。しかし梁間二間分を一面の來迎壁とするのも不自然で、おそらく本来はなかったものと思われる。

ここに安置された清凉寺式釈迦像は既述のように正嘉二年（一二五八）に造立されたと推定されている。建仁三年に貞慶が東室を修理し釈迦大念仏会を開いた時にはまだなく、弘安七年に現在の礼堂・東室を建立した時には存在したことになる。礼堂の南面に広縁を設けて妻入りの仏堂の形式とするのも明らかに本像を礼拝するためである。しかし礼堂

の空間構成はあくまでも舍利殿（鼓樓）に対応するものとなっているのである。

ここで注目されるのは菅家本『諸寺縁起集』（内題「南都七大寺巡礼記」）の招提寺項に記す次の記事である。「宝蔵一宇、在金堂東、鑑真和上持来之三粒仏舍利、納白瑠璃壺、安銅塔、件塔又安銅龜上也（中略）、件舍利毎日午尅奉出東尺迦堂、此堂貞慶上人建立云々、毎年九月^{アキ}日修舍利会、七日七夜、其堂則号舍利堂也（下略）」。「記事に混乱があつて東尺迦堂と舍利堂の二様に呼ばれるが、これが現礼堂であることは間違いない。そこに毎日午刻に宝蔵から舍利が持出されて庶民に参拝させたというのである。同書の興福寺の項には「貞慶上人巡礼記云」として中金堂の箇所には「又於当堂（中略）又二月十四日修報恩会、号舍利会、自承元二年始之云々」とある。承元二年（一二〇八）は貞慶が東室を修理して道場とした建仁二年より六年後である。すると先の記事も同様に「貞慶上人巡礼記」に根拠があり、念仏道場はまた舍利堂と呼ばれて実際に毎日舍利が運ばれたのではなからうか。『千歳伝記』には寛元二年（一二四四）、当寺に入寺した覚盛が舍利殿の真身舍利の前で信如に大比丘尼戒を授けたことを記すが、それも当堂と思われる。現在、礼堂本尊釈迦如来像の前には鎌倉時代の日供舍利塔が安置されているが、これは鼓樓が舍利殿として建立された後も暫くは礼堂前身建物への舍利の出御が続き、それを現礼堂に建替えた際に分置する方式に改めたものと考えられる。

既述のように現在の礼堂はやや狭い南端間を除くと桁行七間、梁間四間で、その柱間寸法は桁行中央間九・七〇尺、両脇三間各九・三一尺、梁間四間各七・三五尺である。桁行の九・三一尺は九・五天平尺、梁間の七・三五尺は七・五天平尺で、これは桁行三間を一位とする僧房が約一〇尺離れて二棟あったのを連続させたものと考えられる。馬道から北の東室は中央を扉口、両脇間を連子窓とする三間一房の構成が外観でもよく判り、その柱間寸法もこれと等しい。講堂と現在の馬道を結んで設けられていた軒廊の南には東一房、東二房と呼ぶ僧房があったから、その後身とみて間違いないであろう。すると貞慶が僧房を改修して道場とした時には南面は切妻造で全体を壁で閉じていた筈で、礼堂はもともと東西方向に開口部を設けた建物であった。

礼堂の東面中央五間には主屋の梁間一間に当たる七・三五尺の出をもつ角柱の向拝が設けられているが、弘安建築当

初は向拝の出は約一〇尺であった。昭和修理時にその礎石が発掘されており、『千歳伝記』の「南方十有三間以号礼堂、加于東西一丈、故十三間与六間也」の記述とよく合う。現在の向拝は室町中期に改造のものとみられ、三方に廻らせた濡縁と同高の板敷床を設けているが、弘安当初の向拝は軒先が低くなるから、おそらく土間であったと思われる。

なお礼堂はこの向拝や前述の厨子を置く来迎壁とその前方の折上げ天井が、室町時代の改造によって設置されて仏堂的性格が強まるが、江戸時代の慶安四年（一六五二）には向拝の柱を頭継ぎで延ばしてその南北にも一間通りを建て増し、南面の広縁も東へ一間拡張して、全体で桁行八間、梁間五間の規模とし、屋根も馬道から南方は棟を半間東寄りで高くする大改造を行った。南面の柱も中央の二本を抜き、従来は建物の中心に柱があったのを五間で中三間は吹き放しに改めた。要するに従来の僧房の延長部分的な外観を、南を正面とする梁間五間・妻入りの仏堂に変身させたのである。しかしこれらは昭和修理時に撤去されて現状に復原された。

馬道を挟んで北方の東室は桁行一〇間で、東西両面とも扉口の両脇間に連子窓にした三間一房の柱間装置が南より三組並び、北端に物置のような一間余分な箇所があつて、ここは扉口としている。内部は各柱筋ごとに梁行方向が長い矩形の面取り角柱を立て、それを結んだ方眼状の内法貫の上に低い棹縁天井を張る。近世初期の境内図を見ても内部は三間ごとに壁で仕切られ、元禄二年（一六八九）の絵図では南から講坊、徳苑院、法花院の名称が付されて、三間一房の制は永く守られてきたのであつたが、元禄十一年に舍利を納めた厨子を鼓楼から移して南から五間を舍利殿・後方の五間を講坊とする改造が行われて常住の役割が失われた。『千歳伝記』は講坊について「即興福之衆侶念仏会中居于此坊也」と記す。昭和十五年の修理では元禄改修時の円柱十一本を撤去し、方柱十五本を補って本来の形式に復原したが、内部は全体を開放の一室にした。これが現状である。

前記の古図では桁行三間ずつ壁で仕切つてそれを一房とするが、東室が鎌倉時代に建立された時には棟通りに壁を設けて梁間方向を二分し、一房は東西二単位で構成されていた。外部に面した柱間装置が建物の東西両側とも中央に扉口、両脇間に連子窓を配置する同じ構えであるのはそのためで、東室には六単位の房室があつたことになる。単位房の間取

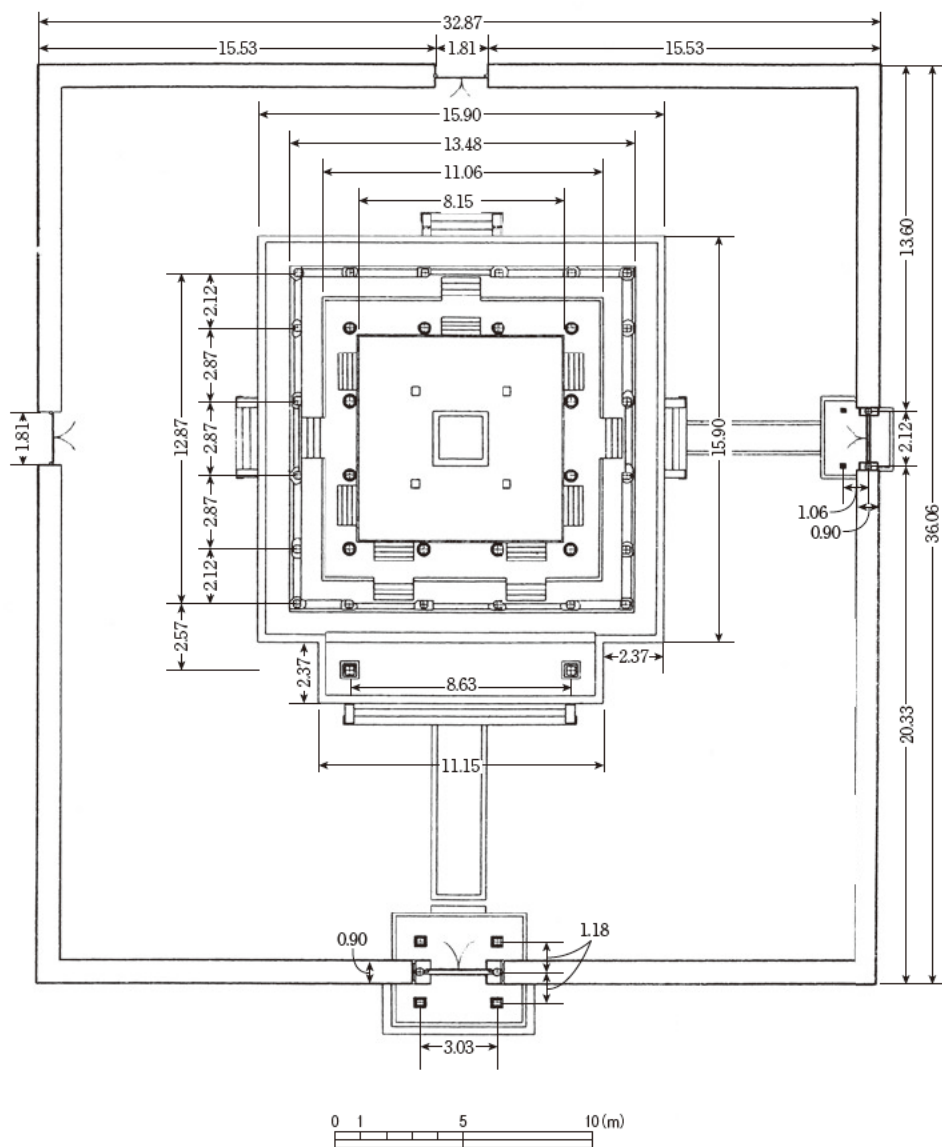
りは中央の扉口を入ったところが奥まで通る長い部屋、両脇の連子窓筋は三畳大の個室が前後二室並ぶ構成となり、窓際が居室、奥の暗い所が寝室にあてられたと推定される。その間仕切り装置は襖や板戸などの引違戸で、柱が角柱であるのはそのためである。大面取りの矩形角柱には平安時代に遡る前身僧房の柱を再用したと思われるものがある。なお、こうした学生寮のような僧房は中世には寺内でも下級の僧の居室となり、上級の僧は独立した坊舎を構えるように変化した。元禄二年（一六八九）の境内絵図には礼堂の東南方の校倉（経蔵）の東に、「応量坊屋敷」として建物のない一劃を画くが、寛元二年（一二四四）に覚盛が入寺し、別院を建てて応量坊と号したというのはこの場所であったのであろうか。

五 戒壇の復活

弘安七年（一二八四）、礼堂・東室の改築が終わるのに引き続いて戒壇が再興された。建築としてはこれが鎌倉時代の当寺復興の一応の締め括りである。同年九月には文永の金堂修理以来伽藍整備に力を尽くした證玄が和上となって、授戒の儀式が行われた。唐招提寺には鑑真在世中から戒壇が設置されていたか否かについて賛否両論あるが、寺伝では当然にその復活としている。

戒壇院は伽藍中心部から西方へ少し離れて西僧房跡の裏手に南北に通る道を隔てて所在し、南北約三六m、東西約三三mのほぼ正方形に築地塀を廻らせている。築地塀には各面中央に門を開くが、後述するようにこれらの門や塀は元禄十一年（一六九八）再建のものである。敷地は伽藍中心部より三m弱高く、築地塀外周に設けた通路の北方と西方は共に高さ約二mの崖になっているから、ここが小山の裾を切り開いた造成地であることが一見して判る。

戒壇とその覆堂跡はこの敷地の中央に在る。ちょうど金堂と講堂間の中庭の真直ぐ西方に当たり、前面の向拝部を除く覆堂の基壇が中庭にスッポリ納まる大きさになっている。覆堂基壇と、その上の二重基壇形式の戒壇は共に花崗岩切



招提寺戒壇堂址実測平面図（奈良県蔵）

石積で、そのために全体が正方形の石壇を三重に積み重ねたように見える。高さは下壇（基壇）七〇cm、中壇（下成壇）が九二cm、上壇が一三八cm、全高は三mとなつて、かなり高い。現在上壇中央にインドのストゥーパ形式の石塔を置くが、これはそれまで何もなくつたのを昭和五十三年に新しく設置したものである。

寺伝によると戒壇堂は弘安七年に建立された後、文禄五年（一五九六）の大地震で他の殿堂と共に倒壊した。その後僅かな小屋で戒壇を覆っていたが元禄九年（一六九六）徳川将軍の母、桂昌院の寄進をうけて再建に着手し、同十一年美麗な堂宇を完成したという。境内絵図でみると元禄二年の図では寄棟造瓦葺の三間堂を画き、後世の裏書に「戒壇堂此時ハ小分之仮屋同様之建物也（下略）」と記すが、江戸時代中期以後の絵図では三間の寄棟造主屋に裳階を廻らせて二重屋根とし、正面に広い向拝を設けた建築となつて、周囲には築地塀が廻らされている。現存するこの築地塀の門をみると近世の靈廟建築様式だから、おそらく戒壇堂も彩色や金具で飾られた靈廟風の建物であつたのであろう。嘉永元年（一八四八）の火災焼失は飾金具目当ての盗人による放火のためと伝えている。

現在の戒壇はこの時の火災で焼けただれた石材を大幅に取り替えて昭和初年に修理したものである。そのため旧材は戒壇の地覆石に相当する部分に残るだけで他はすべて新材となつている。しかし幸に奈良県所蔵の明治時代の実測図があり、それと比べるとほぼ忠実に旧形式が保持されていることが判る。ただし実測図には戒壇の下成壇上に覆堂の主屋に当たる方三間の礎石、その外廻りの基壇面上に方五間の裳階の礎石が画かれているが現在その表示はない。主屋の礎石には禪宗様の礎盤が用いられていた。

戒壇を東大寺戒壇院のものと比較すると、上壇の大きさは東大寺が東西一〇・四〇m・南北七・四二mであるのに対して当寺は方八・一五mでやや小さい。東大寺の戒壇は現在横長の矩形平面となつているが、これは建久八年（一一九七）に重源が再建した堂が永祿十年（一五六七）の兵火に焼かれた後、享保十年（一七二五）に復興した時に覆堂の規模を縮小したためで、室町時代初期の戒壇院古図では正方形に画かれている。古図には建物の規模を記すのでそれから柱間寸法や戒壇の大きさもほぼ判り、上壇は方約一〇mと推定される。現在の長辺がその規模を踏襲するとみられ、唐招

提寺の戒壇は東大寺の約八〇%の大きさで計画されたことが判る。なお道宣が『関中創立戒壇図経』に記す自作（六六七年）の長安城外浄業寺の戒壇は三重で、下壇は方二九・八尺（以下唐尺）、高さ三尺、中壇は方二三尺、高さ四・五尺、上壇は方七尺、高さ二寸、みな石敷とし、上壇上に伏鉢を置いて内に仏舍利を納め上に宝珠をのせるとある。この唐尺をもし大尺とすると、ほぼ唐招提寺に近似するから、当寺戒壇は或いは『戒壇図経』に倣ったのかもしれない。

一方、東大寺と全く異なるのは東大寺の戒壇が現在、漆喰塗の壇正積二重基壇形式であるのに対して、当寺は花崗岩切石を用い、丈の高い葛石と地覆石を三―四段に造り出した変形の壇正積二重壇とすることである。上下框を順次引き込ませて腰部を細めた禪宗様須弥壇の形式を真似たもので、他に例を見ない。四面には階段を設け上壇は東・南・西の三面に各二基、北面に一基、下壇は南面二基、他は各一基を配置する。東大寺の現戒壇はこれと少し異なり下壇の階段が東・南・西三面各二基となっているが、室町時代の古図は当寺と同じで、これは『戒壇図経』の配置と一致し、近世再建時に変更されたことが判る。壇上中央に東大寺では現在方二・二八m、高さ一五cmの台座上に木造多宝塔を安置し、当寺も『諸寺縁起集』（菅家本）に「在戒壇、安宝塔」と記される。明治実測図には中央に方二・一mの台座と、おそらくそこに安置した宝塔を囲む幔幕の支柱用と思われる方三・七mに配置された四箇の小礎石を画くが今はない。中央の俗称三重壇の高さは約一〇cmと伝える。

なおこの戒壇上面は昭和五十三年に発掘調査されている。それによると戒壇は地山を周辺より約一・二m高く削り残し、その上に地山とよく似た土で厚さ〇・六mほどの版築層を築いて造られている。これが当初の土壇でその上面に厚さ約〇・一mの表土層があり、ここから方一間（一辺が約二・九m）の小建築の礎石跡や土壙を検出した。土壙からは奈良時代後半と推定される小埴仏十三個体分や飾金具断片が出土した。現在の戒壇はその上に厚さ〇・六mほどの積土を置いて造られており、外装石積み^(注)の裏込土はこの積土層から切り込まれている。積土には古代から近世にかけての瓦片をはじめ各種の遺物が含まれていた。

以上のような発掘結果からみると現在の戒壇石造物はすべて元禄再建時のもので、平面規模は前身を踏襲しながら成

を約〇・九mほど高くして築き直したものであることが判る。〇・九mというのは残存する元禄の積土層上面から現在の敷石上面までの高さ約〇・三mを加えた数値である。前身となる当初の土壇は一回限りの工作物で、直接年代を知ることができないが、弘安造営のものとしてよいであろう。その外装が石積か漆喰塗かは不明である。版築上の表土層の土壇から出土した埴仏（十三個体分）は同一の原型から造られた縦四・一cm、横二・三cmの小型のもので、おそらく壇上中央に安置された宝塔の台座（三重壇）の側面の荘厳用と思われる。あるいは宝塔自体も古代のもので、それらによって鑑真創建の戒壇の再興であることを示したかと想像されるのである。なお私は唐招提寺には鑑真が設けた戒壇があったと考えており、その場所は伽藍の東方に当たる東塔跡に重なるものと推定しているが今はふれない。

（注）「唐招提寺戒壇の調査」『奈良国立文化財研究所年報』一九七九。